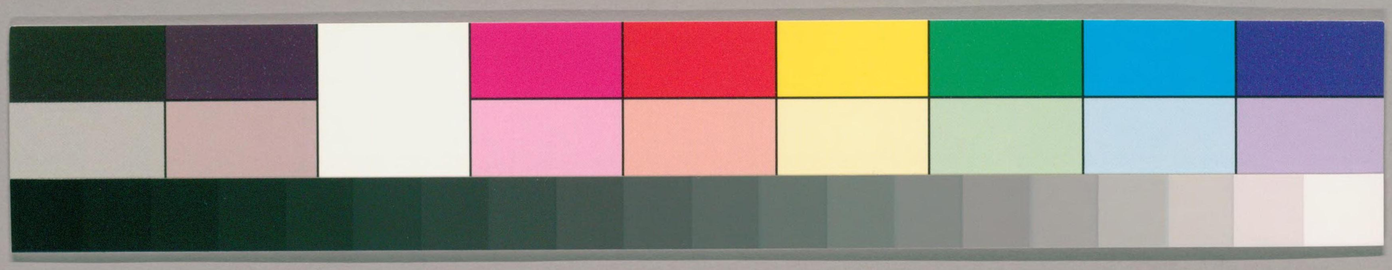


WA 16
130

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

百人一首抄

WA 16
130

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

ガラス使用

百人一首抄

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

ガラス使用

百人一首

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130

ガラス使用

天智天皇

後撰 秋中
秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我衣手は露にぬれつゝ

かりほとは苅穂と云 一説に借庵と云 又かりほの義上
てもいふ 借庵の心なるへし 又苅穂の庵と重ねたり
一首の心は田夫の心に成て読給へる哥也 裏の義理
田夫の身となりて辛労する事を思召て御製の社
も更に秋の田なとは露にてあれは也 かやうの帝恵の
主の万葉に 真木柱作る杣人いさゝめに借庵のためと
作りけめやも 是にて借庵也

持統天皇

新古 夏
春過て夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

春過て夏来るを白妙の衣ほすてふ事に心得て 貴賤の
式の衣はかみ小袖の衣はしたとに一単に移て夏の衣
に着て天下の新古今更衣の節にかへるなり
さて山は藤原宮 持統文武御時離宮にて見立緑林
株の葉に見る時白気といふ春の衣かけと
根と此縁にて鳥の移りかはりと見せて
読侍る奇妙にて見えけり山の色も多く

白妙衣は喩てあそびけるらし同様萬葉に載る
其作も古への歌に似たれ共一句を直して此哥を
小倉に書来衣ほす所汲あらしき流に候由の第二
萬葉には衣ほしたり赤の論には衣ほすてふ新古
今は彼歌入時てふ作りへ改たるかしてふ作ると云しかして
甘橿明神のことと云ども何思ひて不用也

柿本人丸

於是
意ミ

あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝ん

ことごとく序也山鳥の尾の長き事を独寝の夜の長きに

離て夜ハ峯を隔て寝と云ならし山鳥ハ昼ハ来て我尾
と長て寝る秘也ともに寝ることなき也此哥何となく長き
なりて修する事にて一首風ともいふ是彼黄門の人
に叶ふ事也此人の家門に柿樹ありけるより則氏とす

山辺赤人

新古
冬ア

田子の浦にうち出てみれば白妙の富士の高ねに雪は降つゝ

田子の浦は駿河に有浦也海辺の富士の嶽に雪降て見えいかにも景気の
彼浦を出て見れバ雪の景色かゝる風情なる也
有けるを風に喩て云ひ給ふ

ぬ詞なり駿河の国の詞なりとし 此浦の田子文字に
田子の浦駿河に在 いにしへ和の名所也

猿丸大夫

古今 秋上
おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時ぞ秋はかなしき
秋ふかくなりぬれば紅葉の浅く色なるまでに此哥には鹿の奥山に
鹿なき 新古今に立田山梢まばらになるまゝにふかく
哀なりもなくなりぬれば同心也 古今の哥秋は
物思ふ殊に何の物がなしきに 此哥悲きを聞事はなしと
云歌なり

中納言家持

新古 冬
かさゝぎのわたせる橋におく霜のしろきを見れば夜ぞふけにける
かさゝぎの橋に霜と読り 此哥より始りき 此哥
流に見て次に不見或一説に宮庭の天の川
まだ見てゐし事に鵲の橋は有とまだ知
て流るゝ橋におく霜の心也 此とは羽を渡て作りて
用之也 吉野に渡せるも鵲の橋の和也
読足素の哥に鵲の渡せる橋に並霜を取
出に置て作りなして 此哥太和物語にあり

曽祢好忠 曽丹後掾也 是ヲ曽丹と云
難波の与書柿の家ハ伊勢之傳り世中ニ来やならん

安倍仲麿

天の原ハ空ハ春日なりこなたより宗都月ヲ見
ふりさけハふり佗のくと云詞也振離振放ハ同し事なり
見さけ見ハ遥ニ遠く見遣る也此ハ明州の浦にて
此人の餞する唐人の前にて帰朝の志を懐国思
月を見て春日なる三笠の山ニ出し月なよと見なし
此歌ハ三四句ハ春日の中にて三笠山ニ出し也と云事也

喜撰法師

わか庵ハ都のたつミしかそすむ世をうち山と人ハいふ也
宇治山ニ都の巽ニあたれハかく云也たつミハ
そ此云ゝ之ハ詞也住居を云也に云ゝハ包世憂山を
人ハ云ゝ也人の住処り辺ハ云也巽と云字ニ
卯て北宇治山のうちを云字を東の方の卯
の字ニ卯て人ハ卯の方の宿ニ云此ハ憂の字ニ巽を
不違是亦歌の趣なり昔ハ桓道と云てよ
此読人の字ニよりて云之ハ字ありの之中字一首り

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130
ガラス使用

なみおとのよるのうちに
おきつかぜ

小野小町

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

わびぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしてもあはむとぞ思ふ

あまのすむさとをばかれとしらねどもなみのよるこそ人はこひしき

わすれじのゆくすゑまではかたければけふをかぎりの命ともがな

あまつかぜふくにまかせてしらくもの
たえまにやどるよはのつきかな

僧正遍昭

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

つくばねの峰よりおつるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる

陸奥のしのぶもぢずりたれゆゑに乱れむと思ふわれならなくに

君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ

立ちわかれいなばの山の峰におふる
まつとしきかばいまかへりこむ

中納言行平

たち別れいなばの山の峰に生ふる松としきかば今かへりこむ

ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは

住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人めよくらむ

難波潟みじかき芦のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

わびぬれば今はた身をも捨てつべし
わすれむと思ふ心のあるにつけても

在原業平朝臣

わびぬれば今はた身をも捨てつべし忘れむと思ふ心のあるにつけても

いにしへの奈良の都の八重桜けふここのへに匂ひぬるかな

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

あまの原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも

わが庵は都のたつみしかぞすむ
世をうぢ山と人はいふなり

喜撰

わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我が身なりけり

これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関

わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよあまの釣舟

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ
をとめの姿しばしとどめむ

僧正遍昭

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

つくばねの峰よりおつるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる

陸奥のしのぶもぢずりたれゆゑに乱れむと思ふわれならなくに

君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ

立ちわかれいなばの山の峰におふる
まつとしきかばいまかへりこむ

中納言行平

たち別れいなばの山の峰に生ふる松としきかば今かへりこむ

ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは

住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人めよくらむ

難波潟みじかき芦のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

わびぬれば今はた身をも捨てつべし
わすれむと思ふ心のあるにつけても

在原業平朝臣

わびぬれば今はた身をも捨てつべし忘れむと思ふ心のあるにつけても

いにしへの奈良の都の八重桜けふここのへに匂ひぬるかな

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

あまの原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも

わが庵は都のたつみしかぞすむ
世をうぢ山と人はいふなり

喜撰

わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我が身なりけり

これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関

わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよあまの釣舟

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

この天皇在位の時ハ[illegible]まゝ也

國て天下ニ神と不敬して年三年[illegible]

天皇の御事ハ此女院のかはりあはれ也 父の[illegible]

今はにあはれて、なとかはしたまへともわり出家を

何の初に今の歌一首の外一もの歌[illegible]

てんと云事女に心を寄て宣ふの[illegible]と云

陽成院御製

一 つくはねの峰よりおつるみなの川恋そつもりて淵となりぬる

此歌三句ハ譬也 一滴の漸く積りて此みなの川の淵深く如くなる如く思初る心の末ハ今ハ限しらぬ如

なると淵によそへて読給へる歌也 釣殿宮への御製

河原左大臣

一 陸奥のしのふもちすり誰ゆへにみたれそめにし我ならなくに

しのふの郡の乱の摺 もちすりにて乱たる紋ある物也

其上其乱たる紋ハ誰ゆへにかく乱たる思ひ

人の思ひハ一そ乱れそめしと云心ハ我に似と[illegible]

ある乱れそめし事ハ我恋ハれ乱そめてと云儀あらず

の儀と云心也

光孝天皇御製

君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

此哥はみこの御時若菜を摘て人に給はんとて
袖の雪をはらはんて君かために若菜のとしの数を
はらふとおもひけるなり　此若菜をなをたれ志いれ
我の袖の雪をはらはんとて摘給へる御心の哀
と云心也　此御歌をきこしめさるゝ人に君を思て
と見るへきか

中納言行平

立別いなはの山の嶺に生るまつとしきかは今かへりこん

此哥は行平任国のとき因幡の国の任に下りける時よめりとなん
任果て京へ上らんとする時このうたを詠て
下向の人跡を慕ひ給ふ人に来任しと云心也と
にそのまゝ立かへらん今帰りこんと云心也

在原業平朝臣

千早振神世もきかす竜田川からくれなゐに水くゝるとは

神代もきかすといふは神代にも聞す立田川の紅葉の
水に流るゝを見て山の紅葉ちりて満山

の紅葉の下を行水の池をといへる歌と云も用之

藤原敏行朝臣

住の江の岸による浪よるさへや夢のかよひ路人めよくらん

と云ハ席之下云の心ある人の世をはゝかる夜の夢て

しのひても人めをしのふといへる心の義

伊勢

難波潟みしかき蘆のふしのまもあはて此世をすくしてよとや

こふハ蘆のふしのまも逢て此世をすくせとなりといふ心を含く

ふしのまハ節と節との間也

元良親王

わひぬれは今はた同し難波なる身をつくしても逢はんとそ思ふ

此歌ハ後撰ニ事出来て後京極の御息所に忍ひて

侍ける時に後撰にいへり

元良親王ハ陽成院の御子なり

侍りける女の許へ忍ひて通ひ侍りけるをとかめ

ハつらぬ事と恨たるなり

何事も皆昔に違はぬ月と見るにつけては我身ひとり
世上の様を思ひ出して身の恨みの深き悲しき心を
思ひ出たる歌也

菅家

此度はぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに
幣ハぬさと云ハ一般幣を云也ぬさもとりあへずとハ紅葉の錦
紅葉の錦をぬさにせんと也ぬさハ麻を神に手向るとなり彩ハ
何事も裏の事ハ寛平法皇の御幸の時ありしかハ
の切麻なとハ紙を細かにきりて神にたてまつりて社を饗さ
せ奉る事あり此歌ハ自分かはりの紅葉を御手向
時の歌也古今に朱雀院の奈良におはしましける
山にて詠めりといへり奈良坂山にて紅葉を御入興ありと云

三条右大臣

名にし負はば逢坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな
名にしおはゞ逢坂山のさねかづらと云ハ逢坂山と云名のあれハ
さねかづらハ逢坂山に生る
かづらハ五味と云かづら也
木の葉の下草根をはふて遠き所まで来ると縁を
て人知れずくるよしもがなと也

云詞也　亦万葉には乃勝ろうら玉かつらにて其流也
さかりて毎志て用也　又葛(カツラ)さねかつら小(ヲ)なて
さねかつと云詞並なりにて云　縦(久ニカツラ)といふハ用之万葉して玉
かきなむる山の乃勝ろうら乃とてゝそ冬を都か
けり当世ハ乃勝ろうとふらん桃詞と枕なり

貞信公

拾遺
小倉山峯の紅葉々心あらハ今一度のみゆき待なん

此哥ハ延喜の御門をよみ給ふ　亭子院(テイシイン)大井河(オホイカハ)に御幸(ミユキ)ありて御遊ありし
行幸(キヤウゴウ)もしつゝありぬへき所なりに奏を給ひしそのこと

と寛平(クワンヘイ)法皇の臨幸(リンコウ)
と侍りけれハ散(チラ)すなと被仰
紅(ク)葉(?)ハ浅(カ)深(カ)しつゝ

一本　東大寺宝生院之本南都小林楽真
法橋所持青蓮院尊親王ノ
紙抄ニ所在
一本　作者菅家御本ニ有リ

兼輔

新
立二
みかの原わきて流るゝいつみ川いつ見きとてか恋しかるらん
此の原ハ山城の名所瓶原(ミカノハラ)に有之　瓶(ミカ)流るゝに云ハ泉(イツミ)を
うまくたる也　泉門(?)に御記(キ)とハ桃(イトミ)所(カハ)と云ハ今ハ
本哥の心ハ云之三句序(ジヨ)なり　其乃泉にハ泉河のこの川之流
下句の心ハいつ見て恋しかるらん云之　世見(ね)せて

みかのはらわきてなかるゝ
いつみかはいつみきとてか

云初也

赤人万葉より伊勢物語まで何れにも見えたる也

あまたかはりて無定て用也 或は葛かきなどをもいひて

さわると云詞並たるにも云 俤とは用之又万葉にもいふ

うきたむけにも伊勢物語にも見えて … を知る

かり 定は伊勢物語にもいへる 此詞にて知るべし

貞信公

小倉山峰の紅葉々心あらは今一たひのみゆき待なん

此歌は亭子院大井川に御幸ありて 行幸もありぬべき所なりと仰せ給ふにことのよし

奏せんと申て此歌よめり 一首の心は寛平法皇の臨幸に散ずなと

云心は待と云也 此後延喜の行幸をも待へきと也

紅葉に云色あるらむと云の感也 小倉山は嵯峨にあり

中納言兼輔

みかの原わきて流るゝいつみ川いつ見きとてか恋しかるらん

みかの原とは山城の名所也 瓶原に湧て流るゝ泉と云は

うきたる也 泉川は同所にあり 木津川とも云 今は

泉川の上三句序あり いつ見きとは泉川のいつみと取れ

歌は下句の心にあり いつ見きとてか恋しかるらんと云也 未見せて

古今 恋三

有明のつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし

此の心明ぬれば帰る逢瀬の月はつれなく見えて其後思ひ出しもなき夜の別れより後は我
かなしき暁はうき物なりと云る也 此歌を定家卿後の別にもなきと
御身にも暁と待らしと思ひに云る也 さらば不逢ばかり
逢て後いはず此歌を百首の後撰の詞にて云る
定家の心も後撰の詞にてあるめ
此歌を肝要といふ歌也 暁の別の思ひに帰りの
なまめかしきや恨あり

坂上是則

冬

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪

雪の明ぼのは有明の月かと見るまでにみゆる也 吉野の里は雪深き所なれば 月やらんと思ひし也

春道列樹

秋

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

此の歌は志賀の山越にて読りと也 しがらみは
川の事也 風の吹かくる紅葉の流れもあへぬ也

古今 恋三

有明のつれなく見えし別れより暁ばかりうき物はなし

此の心明ぬれど月は無情(イソキ)に見えて家に帰ると
見て、つれなく見えしと云心也。夜の別より後は暁ほど
うき物はなしと也。暁ばかりと云詞も心に深きを云
歌毎に暁を決らしと思ふ里にて云事(バン)也。さて不逢(ニヨニ セイ スメ ハカリ)の
恋に云へ共、両説あり。此歌の後(ゼイ)の詞は哀
深し。定家の心も深く、此の歌を殊に(ホウ)とりて
思ひ用ひて亦式部にも暁のうき事は白雲の
おもてに見えつる物を侍りや也

坂上是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪

雪の光は有明の月のあかりかと見まがふ也
吉野は山なれば雪も深き所也、月やらんと
おぼゆるほど雪の深きに似たるとなり

春道列樹

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

此歌は志賀の山越にて詠るとかや、(ニキイ)岸(ミチ コエ)の通(ワウ)ふ
所の景気(ケイキ)だにも二三の句みな若風の吹とりて心の

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

木葉を流しあへて流れもあへぬと云詞にて下の句に流し
あへぬ紅葉をとゞめて見る詞也或説に水の絶(タエ)たる(ツワル)に木の葉
のとまりたるに浮(ウカミ)てありと風のかけたる柵(シガラミ)と云也
紅葉ある所に柵と云字(ジ)例(タメシ)ありて見るにや

紀友則

(古今 春下) 久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ
春の日の光のどけきを云ておもふに云葉の
らはみにはえそそかし一首(ツ)の姿(スガタ)なく明らかなる
折に花の心は静(シヅカ)にして散(チル)花を惜みけると云

末の句は深くかくて落つるもまた見てよそながら面白く散るは
詠字なくさながら思惟(シユイ)の観念(コヽロ)にあるのなり

藤原興風

(古今 雑上) 誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
これは老年の心にて雑也知人のなきを悲(カナシ)て松は久
物なれど友と思ひけれどもさすがに非情の物なれば
けれは甲斐(カイ)なしと云也朋友(ホウユウ)皆(ミナ)過去(スキサル)と云詞

紀貫之

(古今 春上) 人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける

色いろ(ハセ)の旧友(ダイケウハウ)方(かた)へ行(ゆき)
わかれ 柄(え)のこれも昔(むかし)は春(はる)及(およ)びて梅(うめ)を
折(ヲリ)て遣(つかは)すり その心(こゝろ)ハ花(はな)物(もの)の恨(ウラミ)をも
かこちまと恨(うら)みの心(こゝろ)ハ花(はな)物(もの)の非(ひ)に
お物(もの)梅(うめ)の事(こと)にてこゝに述(のべ)る
外(ほか)にて更(さら)にあり

清原深養父(きよはらのふかやぶ)

夏(なつ)ハ来(き)ぬ 寒(カン)ハ来(ヨイ)ぬるものと
夏(なつ)ハ来(き)ぬ 寒(カン)ハ来(ヨイ)ぬるものと
枕冬(まくらふゆ)の長(なが)き夜(よ)合(あハ)せまこと夏(なつ)の短(みじか)き夜(よ)の雑夜(ヨヒ)

多(おほ)く座(ざ)に居(を)ながらにして
多(おほ)く座(ざ)に居(を)ながらにして
月(つき)の出(いで)入(いり)をも見(み)るなどいふ
月(つき)の出(いで)入(いり)をも見(み)るなどいふ
事(こと)をこゝに述(のべ)るなり

文屋朝康(ふんやのあさやす)

白露(しらつゆ)ハ風(かぜ)の吹(ふき)しく秋(あき)の森(もり)の下(した)草(くさ)
風(かぜ)のしきりに吹(ふき)頻(しきル)るをいふ
表(おもて)ハ草(くさ)木(き)の事(こと)にて裏(うら)ハ人(ひと)の事(こと)
表(おもて)ハ草(くさ)木(き)の事(こと)にて裏(うら)ハ人(ひと)の事(こと)
露(つゆ)ハ涙(なみだ)の事(こと)なり 全体(すべて)の意(こゝろ)ハ
露(つゆ)ハ涙(なみだ)の事(こと)なり 全体(すべて)の意(こゝろ)ハ
多(おほ)く座(ざ)に居(を)ながらにして
多(おほ)く座(ざ)に居(を)ながらにして
月(つき)の出(いで)入(いり)をも見(み)るなどいふ
月(つき)の出(いで)入(いり)をも見(み)るなどいふ
事(こと)をこゝに述(のべ)るなり

右近(うこん)

忘(わす)らるゝ身(み)ハ 思(おも)ひ出(いで)も なし
忘(わす)らるゝ身(み)ハ 思(おも)ひ出(いで)も なし
今(いま)ハ我(わが)身(み)の上(うへ)にて
今(いま)ハ我(わが)身(み)の上(うへ)にて
この歌人(うたよみ)と三首(さんしゆ)まで初(はじめ)の
この歌人(うたよみ)と三首(さんしゆ)まで初(はじめ)の

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

柿本人麿

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜をひとりかも寝む

山辺赤人

田子の浦にうち出でてみれば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ

猿丸大夫

奥山に紅葉ふみわけなく鹿の
声聞く時ぞ秋は悲しき

僧正遍昭

天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ
乙女の姿しばしとどめむ

喜撰法師

わが庵は都のたつみしかぞすむ
世をうぢ山と人はいふなり

小野小町

花の色はうつりにけりないたづらに
わが身世にふるながめせしまに

蝉丸

これやこの行くも帰るも別れては
知るも知らぬも逢坂の関

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

逢ひ見てのちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり

逢ひ見てのちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり

権中納言敦忠

逢ひ見てのちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり

中納言敦忠

逢ひ見てのちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり

中納言敦忠

逢ひ見てのちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり

中納言敦忠

新古 恋一

曽祢好忠

由良のとを渡る舟人かぢをたえ行衛もしらぬ恋の道かな

ゆらハ紀の海南海ニ也海ニある所茫然ニ行しらぬ所也上

三句を序にして我恋の切なるハてもなきと是を喩へ

かぢとハろを絶はなれ楫を捨て舟に任するなり庭とハ

恋道の筋と云則舟路とて河の瀬筋を

云に渡る舟人の千鳥とて浪の上のと渡りつきたる筋の也

也と云

恵慶法師

拾遺 秋

八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり

けり此歌ハ河原院にて荒たる宿ハ淋しきと云心

人こそなけれ秋ハ立八重葎とハ葎の深く茂りたる

云河原院ハ融大臣の作られし所也此大臣ハ

ハ融公在世の時車馬成市門不去

殿ニ荒たる人絶て悲しき体なる様の来たれる

云心にて河原院ハ云学と思ひなり此宿の風似仮令後

成ての歌ハ隠人の秋風吹をと言此上句ハ就

うつまりや云歌也

源重之

詞花 立三
風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくだけて物を思ふ比哉
風をいたみとは風のはげしきを云詞 風痛と云上二句
序也おのれのみとハ浪のミづからと也くだけて思ふハ数々に物を
思ふ心の切なるらし

大中臣能宣

詞花 立上
みかきもり衛士のたく火の夜ハもえ昼ハ消つゝ物をこそ思へ
みかきもりとハ衛府と云事也 左右近衛と云 御垣
守りと云 左右兵衛左右衛門のことなり みかきもり
ハ古今の長歌にも見えたり 衛士のみかきもりとハ
来といへるなり 其被官を士と云へるさ右衛門の
官吏なるけハ云上二句ハ譬也諸悪のもゆるハ焼尽ハ心
の消なり二句 悲き心云らし

藤原義孝

後拾遺 立二
君がため惜しからざりし命さへながくもがなと思ひけるかな
この歌ハよミ女のもとよりかへりて遣ハすとなり
の句の心 古今 命やハ何ぞハ露のあだものを あふにし
みかへバおしからなくにと云る歌の心をよミて

後ハ命にかへてもあはんと思ハ上也
今の時の長からん事をたのむと也

藤原実方朝臣

かくとたにえやハいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを
えやハいはれすと云て思ひをかくと云心
し気ていかにもいかて人につけんとするにいはれさる
下野の国にいふきのさしも草あり艾(モクサ)とも云薬の一名なり
下句の心ハ我思ひの燃(モユル)里なる事ハ六帖(テウ)にもあるまゝ
我ハいふきのさしも草のさしもしらし我思ひのもゆる事をしらしと也

この下の句の心ハ後拾遺に六帖の心を下草京の
えらへる何とて大斎院(イニツウ)にて同事に神楽抄に評

藤原道信朝臣

明ぬれハくるゝものとハしりなから猶うらめしきあさほらけ哉
此歌ハ後朝(コウテウ)の歌也明ぬれハ又くるゝ物と知なから
別の後の恋なれハ暮を待ほとも久しく朝ほらけかうらめしきと也
返し後暮歌也

右大将道綱母

歎つゝひとりぬる夜のあくるまハいかに久しき物とかハしる

後は命を延へてなかくもあれと思ふと也
玉の緒の長きをたのむ心を云也

藤原実方朝臣

（後拾遺 恋一）かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを
えやはいふはえいはぬと云心也 いふきはえいはれぬ事を云かけたり 思ふ心
を顕していはむ者の思ふ程は人つらしと云心也 さしもは
下野の国の名所也 さしもくさは蓬の一名なり
下句の心はさしもかゝる燃る思ひと六帖にもあり
いふきのさしも草をのゝ思ふにたとへていふ也

この下の句の心は誠に燃る思ひの程をさしもしらしと云
えかたき何とも大事の道也 六帖の作者猶袖中抄に詳

藤原道信朝臣

（後拾遺 恋二）明ぬれはくるゝものとはしりなからなを恨めしき朝ほらけかな
是は後朝の恋の歌也 明ぬれは又くるゝものとは知なから
何程の心も別の程はうらめしき朝ほらけと
云後朝の歌也

右大将道綱母

（拾遺 恋四）歎きつゝひとりぬる夜のあくるまはいかに久しき物とかはしる

此歌拾遺（シヤウイ）に入たる様は摂政（セツシヤウ）殿よりまかりけるに門をおそくあけ
ければたちわづらひ（ワヅラヒ）ぬといひ入て侍りければよみて
しらずといひける歌の心其まゝにて独寝（ヒトリネ）のあくる歎（ナゲキ）はいかばかり
久しき物とかは知る摂政（セツシヤウ）へあてたる歌也 恋（コヒ）に侍也

儀同三司母

〔新古　恋三〕

忘れじの行末まではかたければけふを限りの命ともがな

此歌は中関白（シヤウハク）道隆（ミチタカ）かよひ初ける比と也

忘れじは思ふ心（コヽロ）ざし也 行末までかはらじといふとも末は知れぬ人は

難（カタ）き世は不飽（スカヌ）里となる故限りとて命も絶

さらは思ひ盛にて今日死たしと云心也

大納言公任

〔拾遺　千載〕〔誰之〕

滝の音はたえて久しく成ぬれど名こそ流れて猶聞えけれ

この歌拾遺に大覚寺に人あまたまかりて古き滝を

見てよめる也 嵯峨の院の御所にて其滝の跡は

ほとりの石ばかり残りて名のみ高く残る也 下句は心明也

和泉式部

〔後拾遺　恋三〕

あらざらむこの世の外の思ひ出に今ひとたびの逢ふこともがな

久かたの光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ

紀友則

誰をかも知る人にせむ高砂の
松も昔の友ならなくに

藤原興風

人はいさ心も知らず故郷は
花ぞ昔の香に匂ひける

紀貫之

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいづこに月宿るらむ

清原深養父

白雪のふりにし里に春来れば
人も訪はねど鶯ぞ鳴く

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130

ガラス使用

此らはたちまちはれ給ひて作りける此人の歌を
はかなくなりなん（きるとある）あの世へは旅立と旅にゆかん旅に
此世の思ひ出にとて逢度と云りし

紫式部

新古
めくりあひて見しや夫ともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かけ
雑之
此歌ははやくよりわらはともたちに侍りける人の
年比へて行あひたるかほのかにて十月十日比月しきをひて
て帰り侍りけれはとやらん旧（キト）旧云詞書あり
月にきほひてとは月先へ入と思ひよりはやくと云也歌の心は此の
友たちにめくりあひて見し其人なりと思ふ間もなく
別にけれは月の雲かくれにし夜半の月のかけの
たとへなりと云らし

大弐三位

後拾遺
恋二
ありま山（ゐなの）猪名の笹原風吹は（いては）いてそよ人を忘れやはする
この歌はまことに人にわすれられたるにはあらねと
いひよりけるに人の心はわかぬにありま山の心をとて
いに摂津（セツツノ）国の名所也序（ジヨ）詞也下の句の心にいはんと
八雲御抄（ホツゴ）に此の名所のそよとあり夕の詞に此の詞とは鷲（ヨトロリ）の詞こいへ
（タノ字ナシ）

業平朝臣

在原業平朝臣

藤原敏行朝臣

伊勢

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130

ガラス使用

いふ事を心のむなしう成にしてそれにしてあひ見る事になかはさる

事やハ恋の心つかふ事也本のおもひをあはれ逢ふの下句也

赤染衛門

後拾遺 恋二
やすらはて寝なまし物を小夜更て傾ぶくまての月を見しかな

詞書に中の関白少将に侍ける時はらからなる

人に物いひわたり侍けりたのめてこさりけるつとめて

心あらハ女にかはりてよめる心にかはりて女ハいふかひなく

妹に代りて讀る歌也心ハ物して夜更て待居る也

と思ふらんとて待更て夜更て月の傾ぶく迄

只独てつれつれの恨更て夜もすから月を見し

物を恨る心也

小式部内侍

金葉 雑上
大江山いく野の道の遠けれはまたふみもみす天の橋立

詞書に和泉式部保昌に具して丹後国に侍

ける比都に歌合のありけるに小式部内侍

歌よみにとられて侍けるを定頼卿つほねのかたに

まうてきて歌はいかゝせさせ給ふ丹後へ人はつかはしてけむや使まうてこすや

いかに心もとなくおほすらんとたはふれ

此とくさまつ代の事を思ひあかして思ひわびける心なるへし
所何し丹後の歌合侍りけるを越て丹後へゆきしは
天の橋立 遠きなからて天の橋立ハまだ見ぬと云也
此踏みずと云 詞表の儀なり 裏ハ文見ぬと云心ある也
云ハ丹後なる是より云人の名なるへきと云ん

伊勢大輔

詞花 春
古の奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな
此歌ハ或時一条院の御時奈良の八重桜を人
のたてまつりて侍るを其折御前に侍けれは其花を題に
よめとおほせられけれはよめる 上句ハ
八重ハ都は奈良の八重桜也 下ハ今の都
此歌ハ文字に二ツ八重九重の文字の重なりて一ツ八
重桜をけふ九重にと句中にあるを讃る

清少納言

後拾遺 雑二
夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふさかの関はゆるさし
この歌の出来たるは大納言行成物語し侍りける
内の御物忌にこもれはとて急ぎ帰りて
とりの声にもよほされてといひをこせて侍ける

此のうたハ函谷関の事をやはらげてよみけるを
なとうらみたりし返事に逢坂の関に仰らるといひし
よミ侍りしに付りて代の函谷関とハ昔孟嘗君といひし人
秦の世の時函谷関に追かけられて夜深く逃る時
あらて計略に食客三千の徒の中に鶏の
まねを能くする者ありけるに鶏のまねをさせけれハ
関の鶏も声を聞て皆鳴て関を通り亦大客と
て犬のまねする客ハ夫の事のまねを作を許し関の
犬にも成しめ甚関守人の通る事ハあるまじきと思ふ

関守の許さしと云の心ハ二句ハ函谷関の事にて関の
と云ゆゑれりと云事ハ兎もあらんと云詞ハ函谷関をさへしてと
此のまねをしてなかりとも逢坂の関ハ深夜ゆるさ
なにハ許す
なれしかの夜に下句の世に物語の詞を
津人ハ詞物をはかりて下句の世にあらむ
手なと云趣の定家の定字の世にてあらん

左京大夫道雅

今はたゞ思ひ絶えなんとばかりを人づてならで
いふよしもがなといへる詞の歌ハ伊勢の斎宮よりのぼりて

此の心は函谷関の事をやはらげて以てつゞけられた
るとなり。たとへあふさかの関に侍りとも、ゆるさじ
とよみ侍る也。仍て此函谷関とは昔孟嘗君と云
ものかやうの時函谷関に至りて夜深く通らんとするに
其時計略に食客三千の徒の中に鶏客とて鶏の
まねを能する者有けるに鶏のまねをさせければ
関の鶏聞て声を合せて鳴。然れば関守は夜明ぬと思ひ
て犬のまねする客は犬のまねをさせて関の
犬もなきて通る。其時関守人の通るとあやしまぬと思ふ

関を明て通りけるの心を句にして函谷の関守てのり
と云ひけりとて函谷関守こそ
此のまねをしてたばかるとも逢坂の関は深夜に
多謀をまなびて心を云下句之世と心へ物語の詞に
清少納言詞物をはかりて心をいひて孟字之世をあらはす
とむねと云趣之並きと申てかまと云也

左京大夫道雅

今はたゞ思ひ絶えなんとばかりを人づてならでいふよしもがな

此哥は伊勢の斎宮よりの帰りて後

朝ぼらけ宇治の川霧絶えまより
あらはれわたる瀬々の網代木

権中納言定頼

山川に風のかけたるしがらみは
流れもあへぬ紅葉なりけり

春道列樹

ちはやぶる神代もきかず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

在原業平朝臣

朝ぼらけ宇治の川霧絶えまより
あらはれわたる瀬々の網代木

権中納言定頼

山川に風のかけたるしがらみは
流れもあへぬ紅葉なりけり

春道列樹

ちはやぶる神代もきかず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

在原業平朝臣

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

金葉 読之

もろともにあはれと思へ山桜花よりほかにしる人もなし

此哥は大峯にて思ひかけず桜の花のさき
たるを見てよめる歌也心ある人もなき山に花と読る
思ひしに此山深く尋入て花より外の友なく花
を知りて吾人の知けるものは花也因て吾人は傾
の峯（ミチ）逆の峯（キヤリミ子）とて年中出入の道の峯と云御月
この心を見ての歌也

周防内侍

千載 読之

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立む名こそおしけれ

此歌は二月ばかり月あかき夜二条院にて人々あまた
さぶらひて物がたりなどし侍りけるに内侍周防（スハウ）寄り臥して枕をと
のぞむ春の夜に忍びと申て大納言（タイナ）忠家是を枕にて
かひなと見えて御簾の下より腕（タヽ）をさし入て侍ると
ある歌の心は春の夜の夢ばかりなるとはいと短き夜の
はかなく名の立ん事は惜しけれ夢ばかりなる
腕と云事をかひなと云字を読入たり

三条院御製

後拾遺 読之

心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな

みかの原わきて流るゝいづみ川
いつ見きとてか恋しかるらん

河原左大臣

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆえに
乱れそめにしわれならなくに

参議等

浅茅生の小野の篠原しのぶれど
あまりてなどか人の恋しき

貞信公

小倉山峰のもみぢ葉心あらば
今ひとたびのみゆき待たん

中納言兼輔

みかの原わきて流るゝいづみ川
いつ見きとてか恋しかるらん

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける
人目も草もかれぬと思へば

凡河内躬恒

心あてに折らばや折らん初霜の
おきまどはせる白菊の花

恵慶法師

八重むぐら茂れる宿の寂しきに
人こそ見えね秋は来にけり

源重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ
くだけて物を思ふころかな

大納言公任

滝の音は絶えて久しくなりぬれど
名こそ流れてなほ聞こえけれ

和泉式部

あらざらむこの世のほかの思ひ出に
今ひとたびの逢ふこともがな

紫式部

めぐりあひて見しやそれとも分かぬ間に
雲隠れにし夜半の月かな

大弐三位

有馬山猪名の笹原風吹けば
いでそよ人を忘れやはする

赤染衛門

やすらはで寝なましものを小夜ふけて
かたぶくまでの月を見しかな

小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければ
まだふみも見ず天の橋立

伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重桜
今日九重に匂ひぬるかな

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも
よに逢坂の関は許さじ

権中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧絶えだえに
あらはれわたる瀬々の網代木

ガラス使用

吹靡て蘆屋の中に吹入る也丸屋とは蘆を集て
丸くまろめて屋根を柱なしにふきたる也

祐子内親王家紀伊

金葉 恋下
音にきく高しの濱のあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ
（あた浪はいたつら浪也）
この哥は堀川院の御時艶書合に中納言俊忠の
よりく人しれぬ思ひありその浦風に浪のよるこそいはま
ほしけれと讀給へる返哥也いたつらの心なり
音にきくとは聞及ふ也高しは名の高き人と云心也
浪かけの人とは契りをいはゝ後にあまたに袖のぬれん
頼母しと云詞也此哥はたゝ名の高きはいかにも心にはかゝらさ
なる人に心をかけなは身のはてはいかゝと云心也一段たくみの
哥也和泉か俊忠云ものゝ人を思ひかけて浪のよ
るく思ひて忠ありしと云也

権中納言匡房

後拾遺 春上
高砂の尾上の桜咲にけり外山の霞たゝすもあらなん
高砂は尾の上とて山の名也高砂とは砂積て成と云心也尾上をは
八高き山の尾の上と云也此に桜さき山の桜也外山とは麓の山なり
ある也外山霞たゝは奥なる尾上の色は見えまれとよく

新古
秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出る月のかげのさやけさ
秋風にたなびく雲の間より落る雲のたえ〳〵よりもれ
出る月ハ殊(コトニ)さやかなる物ぞと也

待賢門院堀河

千載 恋三
なが〻らん心もしらず黒髪のみだれて今朝ハ物をこそ思へ
歌の心ハ末の契のかはらむ事をもしらずと也
心もとなく思ふ事を黒髪(ミダル)にたとへて思ひみだるゝ
の縁也 又末の事まで思ふに今朝ハ思みだるゝ也

後徳大寺左大臣

千載 夏
郭公なきつる方をながむればたゞ有明の月ぞのこれる
待侍し郭公の一声鳴て其あとハ見えずて
見れば只有明の月のみのこれると也

道因法師

千載 恋
思侘さても命ハある物をうきにたへぬハ涙なりけり
思侘ても命ハあるものをうきに堪忍(カンニン)せぬハ只
涙なりと也 思ひ入ても只

千載 雑中
世中よ道こそなけれ思入山の奥にも鹿ぞ鳴なる

皇太后宮大夫俊成

山の奥までも鹿さへなくなる

こゝろめん世に久しくありけるとて此家に道ゆきそこ
なくこそなれ今いかや山の奥の我ハかりとそ思へハ
爪おくる山にも鹿の鳴けり妻のいろ哀にもきこゆ
是にてもそ之上下の句の心ハ猿丸大夫の奥山にもみち
ふみわけ鳴鹿の一首の心ありと清るも
人にハ成ぬりて思ふハ山の奥にも是すまゐもしおらんと
云所の述懐と添へ歌なり

藤原清輔朝臣

新古 なからへハ又このころやしのハれんうしとみし世そ今ハ恋しき

此一條の体ハ又来らん世に今ハ如何なる世ならんと思ふ共
うき今の世も明日ハ恋しくあらんと云也

俊恵法師

千載 恋二 夜もすから物思ふころハ明やらぬ閨のひまさへつれなかりけり
一首ハ終夜人を待て物思ふありし時の世ハよなよな
夜ハ明やらて閨のひまさへつれなかりけりと云心
そこはかと明やらぬしとしと（?）閨のひまさへつれなかりけりと
思へとそ云へり

西行法師

千載 恋五

なげけとて月やは物を思はするかこちがほなる我涙かな

此歌なげけとて月やは物を思はする、なげけとてなげかすといふ同じ心也と雖、見るには月をなげけとて月やはと云言葉は大江千里が月見れば千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねどと詠て、此歌の心をとりて千載と、恋人思て居は月のさやけき我思のあはれにて、月見るにつけて(ママ)いよいよなかなか涙そあふれると也、なげけとては我人物ぞいてなげかぬと思ひ我涙也

良暹法師

千載 秋下

村雨の露もまだひぬ槙の葉に霧立のぼる秋の夕暮

此歌は村雨晴て其露の槙の葉にまだ白く残りたるに、又夕暮の木の間より立のぼる趣、景気遮眼と云々

皇嘉門院別当

千載 恋三

難波江の蘆のかりねの一夜ゆへ身をつくしてや恋わたるべき

此歌は旅宿逢恋の歌也、かりねの一夜の枕ゆへ身をつくすと、かりそめに逢たる事をわすれがたく思ひ恋わたらんと也、思ふに難波の澪標に寄て此歌の心をまとへ、摂政右大臣の家の歌合に旅宿逢恋と云題也

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130
ガラス使用

とよめるとかや

式子内親王

新古 恋一
玉の緒よ絶なば絶ねながらへば忍ぶる事のよわりもぞする

玉のをとは命之絶なばたえね存へば悪名にて絶なん
いき絶なむと云は家の為人ゆへに思よりて名をとられた
ことを思ふ心也

殷富門院大輔

千載 恋四
見せばやな雄島の海士の袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず

見せばやとは思人に我袖を見せばやと云也 雄島の海士

衣は朝夕なみにぬれてぬるゝとも我は紅涙で袖の
色のかはれる心也ぬれにぞぬれしは重詞也

後京極摂政前太政大臣

新古 秋下
蟋蟀なくや霜夜のさむしろに衣かたしき独かもねむ

蟋蟀なくや霜夜のさむしろに衣かたしき独かもねん
此歌の心は秋も末になりて物さびしきを感(カナシ)み
思ひ人の感(カン)深(フカ)き詞をあつめて一首のうた
作られたる心也衣をかたしく田舎のまみえ心を読て

二条院讃岐

千載 恋三
我袖は塩干に見えぬおきの石の人こそしらねかはく間もなし

我袖はと云て上の句は譬へ下句人こそしらて袖のぬれまさるを常にかはく間もなしと云也 奥の石は海に沈みて云也 独詠

鎌倉右大臣

新勅 羇旅
世中は常にもかもななきさこく海士の小舟の綱手かなしも

上二句の心世中は常にかはらぬ物にもかなと也 四見をさて遠なる渚の小舟を見れは綱手引行を見るに世中はかなき物かなと也 綱手は小舟を引綱也 海士の小舟は小船を云 位文にはかなく見えて浪に漂ふ物かな 末は綱手一段と慕そくあはれにかはりて根本なき事はかなし ものとりあへて見

参議雅経

新古 秋下
みよし野の山の秋風さよふけてふるさと寒く衣うつなり

此吉野は今よりも見よし野と云し 此吉野は古へ宮ありし故に古郷と云 一首の惣意は吉野の山の古郷にて寒く衣うつ也 諸寺の今の歌のふるしの山の秋風夜ふけてと云 一首の風情甚殊勝也

千載 恋三

我袖ハ塩干ニ見えぬ沖の石の人こそしらねかハくまもなき

我袖ハと云て三の句ハ譬也下句人しらすして袖のぬれ

ぬやむ隙かなきを云也奥石ニ寄て云恋也

鎌倉右大臣

新勅 羇旅

世中ハ常にもかもな渚こく海士の小舟の綱手かなしも

二三句の心世中ハ常ニ渚こく海士の小舟の綱手ハ面白

四の句ハ見て遥なる渚の小舟を見て云ニ綱手ハ船ニ付

文ハ物を引まへハ云也海士の小舟ハ小舟とて云

さりかたき位又世の中にハなりて見ては渚海士の物ゝあハれ

末ハ綱手ハ上国まてもあはれなりけん候の事なきハ

もんとりもて下見

参議雅経

新古 秋下

みよしのゝ山の秋風小夜ふけて古郷寒く衣うつなり

此歌古今ニみよしのゝ山の白雪つもるらし古郷寒く

なりまさるなりとある本歌にて一首の心ハ遥に聞ゆる

此吉野ハ撰集ニ入の句の置所同しく一首の

ありて詞寄也今の歌のならしの山の秋風更行て

に古郷寒く如何聞て夜ふけて寒く衣打音古郷と

ハらし昔皇居にてありける事ハ云也

新古 釈教
おほけなくうき世の民におほふかな我たつ杣に墨染の袖　前大僧正慈円

おほけなくとハおそれありと云詞也世の民とハ世界の衆生の事也我立杣とハ伝教大師の阿耨多羅三藐三菩提の仏たち我たつ杣に冥加あらせ給へとよみ給ふ詞より台嶺と云也此山に住侍る故に天台の因縁と而衆生を擁護し給ふと云を袖にたとへてよませ給ふ也袖とは我身に云ハ後撰て大兇

我身の袖のかゝる事をも民に成ると也

新勅 雑
花さそふ嵐の庭の雪ならてふりゆくものハ我身なりけり　入道前太政大臣

花さそふ嵐の庭の雪とハ庭の花を雪と成て見たる也さかりハ過て身ハ権ヶ我身の果ハ老ぬる物なり
懐旧述懐の歌也

新勅 恋三
こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ　権中納言定家

一首の心こぬ人を待夕ハ我身を立に思ひ焦れると云也

ならハ昔皇居にて有けるを云也

前大僧正慈円

おほけなくうき世の民におほふかな我たつ杣に墨染の袖

おほけなくとハおそれおほきと云詞也うき世の民とハ世間の衆生の事也我立杣とハ伝教大師の阿耨多羅三藐三菩提の仏たち我たつ杣に冥加あらせ給へとよみ給ひし詞より台嶺と云也比叡山を伝教あらはし天台の円宗を而衆生に施し給ふと云と袖をおほふとよめる也袖をおほふと云ハ後撰に大空におほふ計の袖もかな春咲花を風にまかせしと也

入道前太政大臣

花さそふ嵐の庭の雪ならてふりゆく物ハ我身なりけり

花さそふハ花をさそふ嵐也庭の雪とハ庭の花を雪と見なして云也さかりハすきて[illegible]我身の果ハくるしき物なり此歌述懐の歌也

権中納言定家

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくや藻塩の身もこかれつゝ

一首の心こぬ人を待夕ハ我身を立[illegible]云也

夕なきの浦の藻塩にからへてよめる歌なりまつほの海ハ
万葉の歌に淡路嶋まつほの浦のあさなきにかり
めかりつゝ夕なきに藻塩やきつゝ思ひ侘ても詞にそ
ふまへて作せられし

従二位家隆

新勅
風そよくならの小川の夕くれハみそきそ夏の
しるしなりける

此哥のならの小川に六月祓するを云ハ万葉にて貴き哥なり
の上河の河風ハ時こそ秋になりしとおも
さハ残暑あつき比ハ風そよく楢の葉も楢の葉柳も風
哉きこし秋の景気に似たるを思ふ也殊にさ川の涼
しさハ秋の比と思ふハ夏思ひ思ふ身なれハ御祓する計
の所そハ夏のしるし也やと思ふと云歌也

後鳥羽院御製

続後撰
人もをし人も恨めしあちきなく世を思ふゆへに物思ふ身ハ

人もをしとハ一切の下民に至るまておしミあはれミ
らし人もうらめしとハ乱逆の臣にかゝりて宸襟を悩せ
承の乱あらましかゝる王道とさたしけるまゝハ政
人ハ口の言味もなきなと云を世に寄する詞なり

句ハ一天の主にて御座あれハ物思ひも人にまさりて深き
ならし賞罰の御志の難有なれ

順徳院御製

百敷や古き軒端のしのふにもなほあまりある昔なりけり

百敷ハ禁中と云事也大内ハ皆宮の事を云て朝
廷と里人の詞也昔ニて軒端ハ古き軒ハ荒廃
まて聖代の昔と思ひあかすそと云御歌也此の
句ハまた忍ふにハつきたる物にて古る家ハ昔を思ふて
かへ入の意也云今ハ道もなの御歌の上ハまた云字
を評ハの忍事ハ道之の時ハ下臣に云宗の位出て称より
寂しき也御云ふの思ひて讀なり

此ノ詞ニ
此百首ハ定家卿宇都宮入道蓮生の嵯峨の山庄
已上相違なし

享禄二年二月六日

[illegible] 判

[illegible]

○天智天皇

舒明天皇第一御子　御諱葛城　第卅九代　御母皇極天皇也

在位十年　天化元戊辰　同十年十二月三日崩　号近江帝大津宮是

后く
居
又号葛城天皇　亦号国原天皇　天命開別（アメミコトヒラテノ）天皇是也

御製

○持統天皇

天智天皇第二御子　女帝　御諱鸕野　第四十代　御母越

智娘蘇我山田大臣女也　天武天皇号始皇后　大和国

藤原宮　御在位十一年　大宝二年壬寅十二月廿二日崩　五十八歳　文

云万葉ニハ高天原広野姫天皇亦高天原　大和国之万歳

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

ガラス使用　挟み込み物

第一巻　春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山

新勅　○柿本人丸

天足彦国押人命之後也敏達天皇御世家門依有柿樹

為柿本臣氏文献通考云大夫姓柿本名人丸

蓋上古之歌人也仕持統文武之聖朝遇新田高市

之皇子云々又詞林采葉云歴見国風土記云天武之御

宇人丸任石見守同九月三日任左京大夫正四位上行次

年三月九日任正三位兼播磨守矣

新勅　○山邊赤人

聖武御時　桓武之比人

新勅　○猿丸大夫

古今集讀人、家

宅貞の字乃家の号今合丸号

○中納言家持

大納言從二位大伴宿祢旅人男

新勅　○安倍仲麿

中務大輔正五位上經之子元正天皇靈亀二年八月廿

二六為学生渡唐朝賜朝氏光仁天皇御宇左大弁

宰相莫常縫シ重テ唐朝ニ被遣テ時飯朝ヒ文述

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130
ガラス使用

第一巻　春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山

ハルスギテナツキニケラシシロタヘノコロモホステフアマノカクヤマ

さらせり　ほしたり

家頌　○柿本人丸

天足彦国押人命之後也敏達天皇御世家門有柿樹

故為柿本氏又敦光卿人丸讃云大夫姓柿本名人丸

蓋上世之歌人也仕持統文武之聖朝遇新田高市

之皇子云　文詞林采葉云反見国風土記云天武天皇

八月人丸任石見守同九月二日任左京大夫正四位上行次

年三月九日任正三位兼播磨守矣

家録　○山辺赤人

聖武帝ノ時秘能文之人

家録　○猿丸大夫

古今集讀人不知　家

是貞のみこの家の哥合の哥

○中納言家持

大納言従二位大伴旅人男

家頌　○安倍仲麿

中務大輔正五位上経(船)守子　元正天皇霊亀二年八月

二而為学生渡唐朝賜朝氏　孝謙天皇御宇左大弁

華桐藤常継ツ遣テ唐朝ハ被遣テ時皈朝之文迄

帰朝ニ云儀立又安倍朝衡子トモ不審或抄云安
倍仲丸遣二使ニ立シハ桓武天皇ノ時也唐玄宗皇帝ノ
御代也一此儀尤不審也江談第三安倍仲麿読歌事
霊亀二年為遣唐使仲麿渡唐之後不帰朝於
漢家楼上餓死云吉備大臣渡唐之時見鬼形与吉
備大臣云読相麦唐土之仲麿帰朝人之読言語云
有禁忌尚不使人也何御遣 あまの原ふりさけ見
まいりてかさの山に出し月かも 此歌ハ仲丸読也と
免ト遣唐使ヤ唐土ニ唐ニテ読人也何ニ支ニ死ト云ヘリ

下官禁忌之事人永久四年三月歌人宮御遣りなりて
月を見て読ける あまの原ーー 此歌ハ昔かうまつりなりて
あの所にはなれけるに緑の国を思ひやりてまうけて
この国にて見わたしたるに思ひてまかりて
こきいれてまかりけりに出見る青の海へ出てつの国人
も見えけれ見ゆる御ふりて月をもりかれ出ると
かしよのかゝりたるかくりかりし

喜撰法師

我国に訓歌人作醍醐是也 又基泉 或撰

阿倍朝臣と云儀并又安倍朝衡子ト云不審或抄ニ安
倍仲丸遣唐使ニ立ハ桓武天皇ノ御時唐玄宗皇帝ノ
御代也ト云儀尤不審也江談抄三ニ安倍仲麿読歌事
霊亀二年為遣唐使仲麿渡唐之後不帰朝於
漢家楼上餓死吉備大臣之後渡唐之時見鬼形与吉
備大臣相談唐土之事仲麿帰朝之詩言語云云
有禁忌尚不使人知何御遣要　あまの原ふりさけ見
出けり乃こゝろの山に出し月　仲歌ハ仲丸読云と
見ゑ遣唐也や是ら先唐にて読也何ハ左注に見えたり

下臣禁忌之事人永久四年三月歌人官御遊りに出て
月を見て読まる　あまの原ーー　此歌ハ昔かくまうかゝ思ひて
あの所に限りなかまうに錦多の道を随兵元々りまうて
この所まうる此の国より又つくまうりかりまうにたちてまうて
ききみんにて折りまうにかめこそ音の海へ出てゝの雲見
いかまた丸ハもとまうりにありて月を詠るに出まると
見てもありと思ひなり給ひてし

喜撰法師

山城国之訓歌人　作倭歌式是也　又基泉　或撰式

撰集 文鴨長明か無名抄云 せみ丸の哥ハ世の中ハとてもかくても
宗へ入て守治山の哉撰ハ住吉流之家ハ此上にた
すの石所に作さ余ハ何せ上を歌にて見へきし事也
銘しらしてハ 小野小町
出羽国郡司當澄女也
銘しらして 蝉丸
相坂蝉丸兎之 作国目録ニ 蝉丸ハ仙人ト 鴨長明云
抄云 相坂の関の明神ト 蝉丸ハ彼かう屋の跡とう
延喜ノ宗ハ神ト成て 絵ニ今モ古おほた

より丹見ハ若 深草れつの尼作也て 和琴を弾ハく良
峯宗貞良将ハそくしこ住ける 事あこまて 出家
小ミわらしてハ 住也 或抄云 或人トハ 右兵衛
會坂の無名の 住あり 或抄云 作国の目録ニ 蝉
丸ハ仙人之情雅ニ不隠 琵琶也ハ 汉謡清テ 帰 文
延喜代 被荅云 不然 又同云 仲月晴 名所何
被荅云 恒 寛平ノ 嵐ト云 文琵琶ト云 遠 依
是 和琴ハ 此比云 何ハ 後外ノ羽 之 流
又流 名 木曲世 作 出何 曲 之 何 或 豪 或 法 卿 上

撰信喜 文鴨長明之名利云むかしの中に廿余所ありけり
山中へ入て方治山之の麓撰ヶ往来路之家は見苦しきた
すの石のむかしにたりし也と案して見へき事也
銘しらして ○小野小町
和羽国郡司堂澄女之
銘しらして ○蝉丸
相坂蝉丸之 佐国日録に蝉丸は仙人也 鴨長明云
或云相坂の関の明神と申は 蝉丸之彼からの跡とう
あらましてそのかみは神と成て給ふなれと今も是ありけなた

よりみえしは若深草れつの位也小そて和羽を深く良
岑家良峯かそてよせけり黄ろ出まて歌
小町かのしそいみそてくて在世 或抄云 或人は右衛と
會坂の関の名蝉丸云 或抄云 佐国の日録と蝉
丸は仙人之情雅有不可説 琵琶は汝譜清て帰る文
心付曲を延代故に被答云 不然 又問云 何曲名何
被答云 恒之寛平仁和云や 又琵琶はと云是
是和琴は何と云 後外の羽を是倦流の
又流ある呼 朱由世伝出百曲也何 或量或法師

悪丁躰也ハ為御忌ニ於遠流

相坂の関ニ庵室を作りて往来の人を見て

〳〵

○参議篁

参議正四位下岑守一男　仁明天皇御宇　承和五年

配流唐使為副使病ヲ辞ス左大弁従三位　仁寿二年

正月卒ハ　隠岐の国ニ流されける時ニ舟ニのりて出たつとて京

なる人のもとにつかはしける

○僧正遍昭

桓武天皇孫大納言安世八男　嘉祥三年三月廿一日仁明

天皇崩　四十一　仍同日落飾号花山僧正遍昭　寛平二

年入滅七十六　俗名良岑宗貞　蔵人頭右近少将

少将　又気ましと云女につかはしける

○陽成院　御製

清和第一皇子　御母皇太后宮高子藤原長良女　二条后　第五十七代

御諱貞明　貞観十八年受禅　陽成院と申　上

釣殿のみこにつかはしける

○河原左大臣

源融　嵯峨天皇第十二皇子　母正四位下大原全子　寛

平七年八月廿五日薨 年七十三

作者 ○光孝天皇御製

仁明第三御子 御母贈皇太后宮藤原沢子 贈太政大臣

総継之女 第五十八代也 位ニ即玉フ 諱時康 又号仁和

皇 又号小松天皇 五十七歳崩 仁和のみかとゝ申 小松

のみかと申 人しかるへきかたに申

○中納言行平

阿保親王男 平城天皇孫 母桓武天皇女 伊登

内親王 正三位民部卿 按察使 仁和三年致仕

○在原業平朝臣

阿保親王第五男 母桓武天皇女 伊登内親王

歌 右近中将 従四位下 二条の后東宮のみやす所と

申ける時 御屏風に立田河にもみち流たるかたをかけりけるを題にて

○藤原敏行朝臣

陸奥按察使 富士丸男 母正四位下刑部卿名虎女

蔵人頭 右近中将 従四位上 右兵衛督 寛平九年卒

歌合の歌

伊勢 七条后女房 伊勢守藤原継蔭女 仍号伊勢 寛平年間為更衣

作者 ○元良親王

平七年八月廿六日薨年三

銘の和　光孝天皇御製

仁明第三御子　御母贈皇太后宮藤原沢子贈太政大臣

総継之女　五十八代　在位三年　御諱時康　又号仁和

皇　又号小松天皇　五十七歳崩　仁和のみかとみこにおは

しましける時人にわかなたまひける御哥

中納言行平

阿保親王男　平城天皇孫　母桓武天皇女伊登

内親王　正三位　民部卿　号梅窓　仁和三年致仕

在原業平朝臣

阿保親王第五男　母桓武天皇女伊登内親王

號在五中将　従四位下　二条の后東宮のみやす所と

申ける時御屏風に立田河にもみち流たるかたかけるを題にてよめる

藤原敏行朝臣

陸奥按察使富士丸男　母正四位下刑部卿名虎女

蔵人頭右近中将従四位上右兵衛督　寛平九年卒

うた合の哥

銘の和　元良親王

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

ガラス使用

陽成院第一皇子 御母主殿頭公常女 三品 天慶六年薨

さてすまひて後 事出来てのちやすからぬことわりなり

〽作者拾遺集には 読人しらずとあり

○素性法師

左近中将良岑宗貞遍昭子 寛平中時任律師法

和殿之人也 俗名左近将監玄利

詠しらせて

○文屋康秀

先祖不詳 式部中納言朝康子也 縫殿助 後参河掾 号

文琳 是貞のわか子朝康の父合のあり

○大江千里

参議音人五男 内蔵少允従五位下是貞の甥子哉

或説 是貞の子合とあり

○菅家

参議刑部卿是善卿三男 後贈太政大臣 延喜

三年薨 菅原院に小野にすかりて童子の姿にて

又ノ説 菅家承和十二乙丑誕生 母大伴氏女

○三條右大臣

定方 高藤公三男 天慶四年薨 五十三 廿六なりてあり

○貞信公

小倉山峯たつ鹿の
歩みより
はや下葉色づく
秋の夕暮

○大納言公任

三笠山さしても出し
月かげの
かすがの春を
思ひこそやれ

○和泉式部

あらざらむ
この世のほかの
思ひ出に
今ひとたびの
あふこともがな

○紫式部

めぐりあひて
見しやそれとも
わかぬまに
雲がくれにし
夜半の月かな

○大弐三位

有馬山
猪名の笹原
風吹けば
いでそよ人を
忘れやはする

○赤染衛門

やすらはで
寝なましものを
さ夜ふけて
かたぶくまでの
月を見しかな

○小式部内侍

大江山
いく野の道の
遠ければ
まだふみも見ず
天の橋立

○伊勢大輔

いにしへの
奈良の都の
八重桜
けふ九重に
にほひぬるかな

○清少納言

夜をこめて
鳥のそらねは
はかるとも
よに逢坂の
関はゆるさじ

○左京大夫道雅

今はただ
思ひ絶えなむ
とばかりを
人づてならで
いふよしもがな

○中納言定頼

朝ぼらけ
宇治の川霧
たえだえに
あらはれわたる
瀬々の網代木

○権中納言朝光

うかりける
人を初瀬の
山おろし
はげしかれとは
祈らぬものを

○謙徳公

あはれとも
いふべき人は
思ほえで
身のいたづらに
なりぬべきかな

○曽禰好忠

由良の門を
渡る舟人
かぢを絶え
ゆくへも知らぬ
恋の道かな

○恵慶法師

八重むぐら
しげれる宿の
さびしきに
人こそ見えね
秋は来にけり

○源重之

風をいたみ
岩うつ波の
おのれのみ
くだけて物を
思ふころかな

○大中臣能宣朝臣

みかきもり
衛士のたく火の
夜は燃え
昼は消えつつ
ものをこそ思へ

○藤原義孝

君がため
惜しからざりし
命さへ
長くもがなと
思ひけるかな

○藤原実方朝臣

かくとだに
えやは伊吹の
さしも草
さしも知らじな
燃ゆる思ひを

○藤原道信朝臣

明けぬれば
暮るるものとは
知りながら
なほうらめしき
朝ぼらけかな

○右近

忘らるる
身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるかな

○中納言高遠

逢ひ見ての
のちの心に
くらぶれば
昔は物を
思はざりけり

○権中納言敦忠

逢ふことの
絶えてしなくは
なかなかに
人をも身をも
恨みざらまし

○中納言朝忠

逢ふことの
たえてしなくは
なかなかに
人をも身をも
恨みざらまし

○中納言行平

立ち別れ
いなばの山の
峯に生ふる
まつとし聞かば
今かへりこむ

○在原業平朝臣

ちはやぶる
神代もきかず
竜田川
からくれなゐに
水くくるとは

○藤原敏行朝臣

住の江の
岸による波
よるさへや
夢の通ひ路
人目よくらむ

○伊勢

難波潟
みじかき芦の
ふしの間も
逢はでこの世を
過ぐしてよとや

○元良親王

わびぬれば
今はた同じ
難波なる
みをつくしても
逢はむとぞ思ふ

○素性法師

今来むと
いひしばかりに
長月の
有明の月を
待ち出でつるかな

○文屋康秀

吹くからに
秋の草木の
しをるれば
むべ山風を
あらしといふらむ

○大江千里

月見れば
ちぢに物こそ
悲しけれ
わが身ひとつの
秋にはあらねど

○藤原菅根朝臣

すがの根の
長き春日を
暮らしつつ
ひとりぬる夜の
あくるものとは

○藤原忠平

小倉山
峯のもみぢ葉
心あらば
今ひとたびの
みゆき待たなむ

○藤原兼輔朝臣

みかの原
わきて流るる
いづみ川
いつ見きとてか
恋しかるらむ

○源宗于朝臣

山里は
冬ぞさびしさ
まさりける
人目も草も
かれぬと思へば

○凡河内躬恒

心あてに
折らばや折らむ
初霜の
おきまどはせる
白菊の花

○壬生忠岑

有明の
つれなく見えし
別れより
暁ばかり
憂きものはなし

○坂上是則

朝ぼらけ
有明の月と
見るまでに
吉野の里に
ふれる白雪

○春道列樹

山川に
風のかけたる
しがらみは
流れもあへぬ
紅葉なりけり

○紀友則

ひさかたの
光のどけき
春の日に
しづ心なく
花の散るらむ

○紀貫之

人はいさ
心も知らず
ふるさとは
花ぞ昔の
香に匂ひける

○清原深養父

夏の夜は
まだよひながら
明けぬるを
雲のいづこに
月やどるらむ

○文屋朝康

白露に
風の吹きしく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞ散りける

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

白菊の花なれとあり

○壬生忠岑 右兵衛府生

右衛門府生安綱子 左近衛府生 御厨宣外
膳部 摂津権大目 泉大将定国随身

○坂上是則

父不知
大内記 従五位下加賀介 或作書 御書所預 望城父 田村将軍末孫
大和国にまかれりける時に雪のふりけるを見てよめるとあり

○春道列樹

従五位下 雅楽頭 新名宿禰男 文章生 正六位上 壱岐守 赴
志賀の山越にてよめるとあり

○紀友則

大内記 紀有朋男 紀納言末と
桜の花のちるをよめるとあり

○藤原興風

治部少丞 道成男 参議浜成孫 下総権守

○紀貫之

紀文幹子 貫之 従五位上木工権頭 紀章 内御書所預 宿
初瀬にまうつることにやとりける人の家にひさしくやとらて程へて後にいたれりけれは かの家のあるしかくさたかになんやとりはあるといひいたして侍りけれは そこにたてりける梅の花を折てよめるとあり

白雲のたなひくとあり ○壬生忠岑

右兵衛府生 本ハ忠衡子 左近府生 御厨子所定外

膳部 摂津権少目 右衛門府生 退出

ケ不知 ○坂上是則

右馬允 従五位下 加賀介 好蔭男 書博士 坂上氏

大和の国にまかりける時の雪のふりけるをみてよめる

○春道列樹

従五位下 雅楽頭新名宿禰男 文章生 正六位上 壱岐守 卒

志賀の山越にてよめる

○紀友則

大内記 紀有朋男 イ紀望行 桜花のちるをよめる

○藤原興風

治部少丞 道成男 参議浜成曽孫 下総権大掾

○紀貫之

紀文幹子 従五位上 木工権頭 延長八年任土佐守

はつせにまうつるごとにやどりける人の家に久しくやどらで程へて後にいたれりければ かの家のあるじかくさだかになむやどりはあるといひ出して侍りければ そこにたてりける梅の花を折てよめる

○清原深養父

豊前守房則男筑前介海雄孫従五位下内蔵大允

新古 誰也月乃かりのあまり夜あかしまてよめり

○文屋朝康

先祖不伝 近江二任大舎人允 延喜比の人也

○右近

右近少将季縄女

後ニらて和物語ニ女かはらさの身ハとよみしのことを

みてよみ出て右小まつのちかひしかはらさりける恋の事を しよみハえき

○参議等

源中納言従三位希一男 母武子 正四位下左中将勘解由

天暦五年三十歳 七十二

○平兼盛

人王ゆかりしき

筑前守篤行王三男 赤染衛門父従五位上 光孝御末也

○壬生忠見

天暦御時歌合

右衛門府生忠岑男 天徳二年摂津大目 其名忠実

○清原元輔

天暦内裏歌合

春光一男 深養父孫 母筑前守高利女 肥後守従五位上

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

ガラス使用

今うて侍る女と人とうつくし

○権中納言敦忠

駒なべて冬の originally 秋の草しげき
あすの原野は思ひやるべし

後撰 冬 雑下

○中納言朝忠

あふ事を逢坂山のさねかづら
人にしられでくるよしもがな

拾遺 恋二

○謙徳公

忘れじの行末まではかたければ
今日を限りの命ともがな

拾遺 恋四

○清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつつ
末の松山波こさじとは

後拾遺 恋四

○権中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧絶えだえに
あらはれわたる瀬々の網代木

千載 冬 天禄三年 二十五首歌合

○藤原義孝

君がため惜しからざりし命さへ
長くもがなと思ひけるかな

後拾遺 恋三

○藤原実方朝臣

かくとだにえやはいぶきのさしも草
さしも知らじな燃ゆる思ひを

後拾遺 恋一

○藤原道信朝臣

明けぬれば暮るるものとは知りながら
なほうらめしき朝ぼらけかな

後拾遺 恋三

○右大将道綱母

嘆きつつひとりぬる夜の明くる間は
いかに久しきものとかは知る

拾遺 恋四

○儀同三司母

忘れじの行末まではかたければ
今日を限りの命ともがな

新古今 恋四

○大納言公任

滝の音は絶えて久しくなりぬれど
名こそ流れてなほ聞こえけれ

後拾遺 雑一

○和泉式部

あらざらむこの世のほかの思ひ出に
今ひとたびの逢ふ事もがな

後拾遺 雑六

○紫式部

めぐりあひて見しやそれとも分かぬ間に
雲隠れにし夜半の月かな

新古今 雑上

○大弐三位

有馬山猪名の笹原風吹けば
いでそよ人を忘れやはする

後拾遺 恋三

○赤染衛門

やすらはで寝なましものを小夜更けて
かたぶくまでの月を見しかな

後拾遺 恋四

○小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければ
まだふみも見ず天の橋立

金葉 三奏本 雑上 詞書「和泉式部に代りて」

○伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重桜
今日九重に匂ひぬるかな

詞花 春

○清少納言

夜をこめて鳥の空音はかるとも
よに逢坂の関は許さじ

後拾遺 雑二

○左京大夫道雅

今はただ思ひ絶えなむとばかりを
人づてならで言ふよしもがな

後拾遺 恋三

○権中納言匡房

高砂の尾上の桜咲きにけり
外山の霞立たずもあらなむ

後拾遺 春上

○源俊頼朝臣

憂かりける人を初瀬の山おろし
はげしかれとは祈らぬものを

千載 恋三

○藤原基俊

契りおきしさせもが露を命にて
あはれ今年の秋もいぬめり

新古今 恋五

○法性寺入道前関白太政大臣

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと
人には告げよ海人の釣舟

詞花 雑下

○崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の
われても末に逢はむとぞ思ふ

詞花 恋上

○源兼昌

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に
いく夜ねざめぬ須磨の関守

新古今 冬

○藤原清輔朝臣

ながらへばまたこの頃やしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき

新古今 雑下

○待賢門院堀河

ながからむ心も知らず黒髪の
乱れて今朝は物をこそ思へ

千載 恋三

○小侍従

有明の月待つ宵の村雨に
露ももらさぬ山のかけ橋

新古今 恋三

○藤原清輔朝臣

嘆けとて月やは物を思はする
かこち顔なるわが涙かな

新古今 恋五

○藤原成通卿

思ひわびさても命はあるものを
憂きに堪へぬは涙なりけり

千載 恋三

○崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の
われても末に逢はむとぞ思ふ

詞花 恋上

○源兼昌

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に
いく夜ねざめぬ須磨の関守

新古今 冬

○藤原清輔朝臣

ながらへばまたこの頃やしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき

新古今 雑下

○待賢門院堀河

ながからむ心も知らず黒髪の
乱れて今朝は物をこそ思へ

千載 恋三

○小侍従

有明の月待つ宵の村雨に
露ももらさぬ山のかけ橋

新古今 恋三

○藤原清輔朝臣

嘆けとて月やは物を思はする
かこち顔なるわが涙かな

新古今 恋五

○藤原成通卿

思ひわびさても命はあるものを
憂きに堪へぬは涙なりけり

千載 恋三

○崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の
われても末に逢はむとぞ思ふ

詞花 恋上

○源兼昌

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に
いく夜ねざめぬ須磨の関守

新古今 冬

○藤原清輔朝臣

ながらへばまたこの頃やしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき

新古今 雑下

○待賢門院堀河

ながからむ心も知らず黒髪の
乱れて今朝は物をこそ思へ

千載 恋三

○小侍従

有明の月待つ宵の村雨に
露ももらさぬ山のかけ橋

新古今 恋三

○藤原清輔朝臣

嘆けとて月やは物を思はする
かこち顔なるわが涙かな

新古今 恋五

○藤原成通卿

思ひわびさても命はあるものを
憂きに堪へぬは涙なりけり

千載 恋三

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

俊子也 後冷泉院春宮時百首ありけるによめる

○大中臣能宣

祭主神祇大副 正四位下頼基男

題しらす

○藤原義孝

一条摂政謙徳公三男 母代明親王女 右近少将從五位上 康平三八六 土佐国配流

ありとこりくりし ゆるしまう

○藤原実方朝臣

侍従定時男 陸奥守正四位下

あかしくけ ゆるしまう

○藤原道信朝臣

法住寺太政大臣恒徳公四男 母謙徳公女 左近中将從四位下

女のもとより 雪ふりける日かへりて つかはしける

○右大将道綱母

陸奥守藤原倫寧女 摂政太政大臣兼家室 長能妹

入道摂政まかりたりけるに門をおそくあけけれは立わつらひぬといひ入て侍けれは

○儀同三司母

從二位成忠女 帥内大臣 中関白 道隆室 伊周公母 又高内侍

中関白かよひそめ侍りけるころ 道隆公中将としと云

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130

ガラス使用

○大納言公任

三条関白太政大臣頼忠(廉義公)一男 小野宮太政大臣実頼孫

母代明親王女 号四条大納言 正二位

哥学者にて人に倍す風雅の道にすくれ文学にも詩作にもすくれたり

○右清者不任

千載集詠之 其の太子にも歌よみの道をよく伝へたる人にて 前大納言公任

○和泉式部

上東門院女房 越前守正四位下大江雅致女 母越中守

保衡女 昌子内親王乳母 和泉守道貞為妻 仍有此

名 私云和泉式部者(雖有異説) 有云説 拾遺集雅致女式部トアリ 人ちもゐ

いみじき歌よみにて此人のうちにすくれたり

○紫式部

越前守為時女 鷹司(殿)女房 母常陸守為信女 源氏物語

中作紫巻 仍号紫式部 為やさしく見所ある歌よみにて作者の

はやくよりわらはともたちに侍りける人の

年比へて行あひたるほのかにて十(七)月十日のころ月にき

ほひてかへり侍りけれハ

○大弐三位

山城守正五位下宣孝女 母紫式部 後冷泉院御乳母

国立国会図書館 タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130
ガラス使用

大宰大弐成章妻　仍号大弐三位　是ハ才女なれとも
此歌にて名たかくなりたるよし也

○赤染衛門

大隅守赤染時用女　鷹司殿女房　実平兼盛女也
仕鷹司殿太后号　赤染衛門ハ
中関白少将に侍りける時はらからなる人に物いひ渡侍
りけるにたのめてまうてこさりけるつとめて女にかはりてよめる

○小式部内侍

陸奥守橘道貞女　和泉式部女　上東門院女房
和泉式部保昌にくして丹後国に侍りける比都に歌
合のありけるに小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを
定頼つほねのかたにまうてきて歌はいかゝせさせ給ふ
丹後へ人はつかはしてけんや使まうてこすやいかに心
もとなくおほすらんとたはふれて立けるを引とゝめて

○伊勢大輔

祭主輔親女　上東門院女房
一条院の御時ならの八重桜を人の奉りて侍けるを其折御前
に侍りけれは其花を給ひて歌よめと仰けれはよめる

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130　ガラス使用

○清少納言

清原元輔女　一条院皇后定子女房

抄云行成物語ありし作者ハ内の物忌ニこもりゐて

おそくかへりて明日あそびて鳥の声にもよほされてといひおこせたり

作者返しハ夜ふかゝりける鳥の声ハ函谷関の事にやと

いひやりけれバ立かへり是ハ逢坂の関なりといひけれバよめる

○左京大夫道雅

帥内大臣伊周公息　母ハ大納言重光女

伊勢の斎宮なりしのかへりて作者人しのびて通ひけるハ

きこしめして守女などつけてまもらせ給ひけれバ忍びにも

まいらで思ひわびてよめる　如此ニ書出しける作者

○権中納言定頼

大納言公任子　母昭平親王女

宇治にてよみける作者の歌なり

○相模

入道源頼光女房　父不詳　相模守大江公資室故号

相模ハ初名侍従　永承四年内裏歌合ニ

○大僧正行尊

白河院御宇 三井寺ノ平等院 又云小一条院ノ孫 敦明親王

三条院御子 参議基平子

大峯にて思ひかけずして桜の花の咲けるを見て

周防内侍

周防守継仲女 冷泉院女房

二月ばかり月あかき夜二条院にて人々あまたゐあかして物語などし侍るに周防内侍よりふして枕もがなと忍びやかにいふをききて大納言忠家是を枕にとてかひなをみすの下よりさし入て侍るを春の夜のとよみて侍る

入れ侍るとて歌よりて春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそをしけれと 忠家

三条院御製

冷泉院第二御子 母贈皇后宮藤原超子兼家公女 在位五年 諱居貞 第六十七代 寛仁元年五月九日崩 四十二

心にもあらでながらへて侍らん何ありしめぐる世の月の あはれまさると侍らんとて

能因法師

橘永愷 俗名 肥後守元愷子 号古曽部入道

永承四年内裏歌合によめる

。良暹法師

父不詳、祇園別当、妻不知何

ぐらしき　。大納言経信

中納言道方男　母源国盛女

師賢朝臣の梅津の山里に罷りて人々うたよみけるに

田家の秋風といふことをよめる

。祐子内親王家紀伊

源頼国女　式部丞経重女とも

後冷泉院御時高倉一

宮とは此人の事也

堀河院御時艶書合には中納言俊忠人しれぬ思ひありそ

の浦風に波のよるこそいはまほしけれと云ける返し　の返し

。権中納言匡房

散位従四位下成衡男　母橘孝親女　左大弁正四位下

内大臣家にて人々酒たうべて歌よみ侍りけるに

遥に山桜を望むといふ心をよめる

。源俊頼朝臣

従四位上木工頭

経信男　母貞高女　貞とも

権中納言俊忠家に恋の十首の歌読侍ける時祈不逢恋と云心を

○藤原基俊

右大臣俊家男 母高階順業女

僧都光覚維摩会の講師の請を申けるをたひ〳〵もれにけれは

法性寺入道前太政大臣に恨申けるをしめちか原と

侍けるを又その年ももれにけれはつかはしける

○法性寺入道前関白太政大臣

忠通 知足院入道忠実一男 母右大臣顕房女 法名円観

新院位におはしましける時海上遠望と云事を読侍ける

○崇徳院御製

鳥羽院第一御子 母待賢門院璋子大納言公実女

諱顕仁 人皇七十五代 在位十八年号ハ新院 又号讃岐院

保元々年七月廿三日配讃岐国 長寛二年八月廿六日崩

詞花集とハ新院御製とあり

題しらて

○源兼昌

宇多源氏 左大臣雅信公五代孫 右兵衛督師頼朝臣之孫

従五位下俊輔朝臣二男 金葉以下作者

関路千鳥と云事を

権中納言俊忠卿ハ此の十首の歌後撰作者なる時ハ不審也とぞいへる

○藤原基俊

右大臣俊家男　母高階ノ女

僧都光覚維摩会の講師の請を申けれど度々もれける時公にうれへ申て

是ハ法性寺入道前太政大臣に申させ給ひしに　しめぢが原と

仰られけるその後又その年ももれにけれハよみてつかはしける

○法性寺入道前関白太政大臣

忠通　知足院入道忠実一男　母右大臣顕房女　法名円観

新院位におはしましし時　海上遠望と云事をよませ給けるによめる

○崇徳院御製

鳥羽院第一御子　母待賢門院璋子　公実公女

諱顕仁　人王七十五代　在位十八年　号ハ新院　又号讃岐院

保元々年七月廿三日配讃岐国　長寛二年八月廿六日崩

詞花集にハ新院御製とあり

○源兼昌

宇多源氏　左大臣雅信公五代孫右衛門権助俊輔男

従五位下皇后宮少進　金葉以下作者

関路千鳥といへる事を

権中納言後に書に此の十首の歌後撰集に見不審也と云々
○藤原基俊
右大臣俊家男　母高階順業女
俊基学維摩会の講師請けれ共叶はさりけれは
光は法性寺入道前太政大臣にうらみ申けれはしめぢが原と
侍出て又その年もかなはさりけれはよみてつかはしける
忠通　太政大臣
忠通　母　源国観
新院位……讃岐に行幸ならせ給

鳥羽院……繩云藤原公実女
御諱顕仁……院　又号讃岐院
保元々年七月廿三日配讃岐国　長寛二年八月廿六日崩　御年
御製……詞花集に新院御製とあり
○源兼昌
宇多源氏右大臣雅信公五代孫右馬権頭俊輔朝臣之子
後撰輔朝臣二男金葉以下作者
堀河百首作者也

美

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用　挟み込み物

左京大夫顕輔
修理大夫顕季卿之男
崇徳院に百首歌奉りけるに
待賢門院堀川
神祇伯顕仲女
崇徳院国母　鳥羽院后　白河院ノ猶子
公実ノ女
百首の歌奉りける時恋の心をよめる
後徳大寺左大臣
実定　右大臣公能男　母中納言俊忠女
暁聞郭公といへる心をよみ侍りける
道因法師
清孝男　藤原敦家孫　俗名敦頼
顕広　皇太后宮大夫俊成
権中納言俊忠四男　母伊与守藤原敦家女　或云顕隆卿女
正三位　安元二九廿八依病出家法名釈阿　元久元十一卅薨　九十一
述懐百首歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる
顕輔男
藤原清輔朝臣
[illegible]
俊恵法師
俊頼子

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

恵慶法師

権中納言敦忠

逢坂は人越え行きて
清水見し
影も変わらず
もちの月かな

清原元輔

契りきな
かたみに袖を
しぼりつつ
末の松山
波越さじとは

権中納言敦忠

あひ見ての
のちの心に
くらぶれば
昔は物を
思はざりけり

中納言朝忠

逢ふことの
絶えてしなくは
なかなかに
人をも身をも
恨みざらまし

謙徳公

あはれとも
いふべき人は
思ほえで
身のいたづらに
なりぬべきかな

曽禰好忠

由良の門を
渡る舟人
かぢを絶え
行くへも知らぬ
恋の道かな

恵慶法師

八重むぐら
しげれる宿の
さびしきに
人こそ見えね
秋は来にけり

源重之

風をいたみ
岩うつ波の
おのれのみ
砕けて物を
思ふころかな

大中臣能宣朝臣

みかきもり
衛士のたく火の
夜は燃え
昼は消えつつ
物をこそ思へ

藤原義孝

君がため
惜しからざりし
命さへ
長くもがなと
思ひけるかな

藤原実方朝臣

かくとだに
えやは伊吹の
さしも草
さしも知らじな
燃ゆる思ひを

藤原道信朝臣

明けぬれば
暮るるものとは
知りながら
なほうらめしき
朝ぼらけかな

藤原清輔朝臣

なげけとて
月やは物を
思はする
かこち顔なる
わが涙かな

藤原高遠朝臣

忘らるる
身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるかな

藤原伊尹

あはれとも
いふべき人は
思ほえで
身のいたづらに
なりぬべきかな

藤原道信朝臣

明けぬれば
暮るるものとは
知りながら
なほうらめしき
朝ぼらけかな

藤原清輔朝臣

なげけとて
月やは物を
思はする
かこち顔なる
わが涙かな

藤原高遠朝臣

忘らるる
身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるかな

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130

ガラス使用

頼政女　一条院之　後白河院御宇
宰石兵紀以下仏社ともある
○鎌倉右大臣
実朝　征夷大将軍　頼朝二男
○参議雅経
覚玄
刑部卿頼経男
飛鳥井のおこりと
○前大僧正慈円
法性寺関白忠通公男　後京極摂政伯父。久寿二乙亥四月十五日誕生
母就職所女房加賀　従五位上仲光女
第六十二代座主　謙道性（?）参和元年六月改名慈円（?）　花歳（?）
嘉禄元乙酉九月廿五日入滅　[illegible]　謚号慈鎮　[illegible]
○入道前太政大臣
公経
西園寺公経　実宗男
落花　花さそふ見侍る
○権中納言定家
俊成二男　母若狭守親忠女　正三位民部卿　[illegible]
元久文治季元　後京極　貞永元十二月出家　法名明静　仁

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130
ガラス使用

治二年八月廿日薨 年三 平治元誕生

建保六年内裏歌合恋

○従二位家隆

権中納言光隆四男

寛喜元年女御入内屏風に

○後鳥羽院御製

高倉院第三御子 御母七条院殖子 御諱尊成（タカナリ） 八十

二代 在位十五年 御追号顕徳院

[illegible]

○順徳院御製

後鳥羽院第三皇子 御母修明門院 御諱守成 八十四代

在位十一年 号佐渡院 承久三年七月廿一日配于佐渡

[illegible] 仁治三 九月崩

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

ガラス使用

238
78

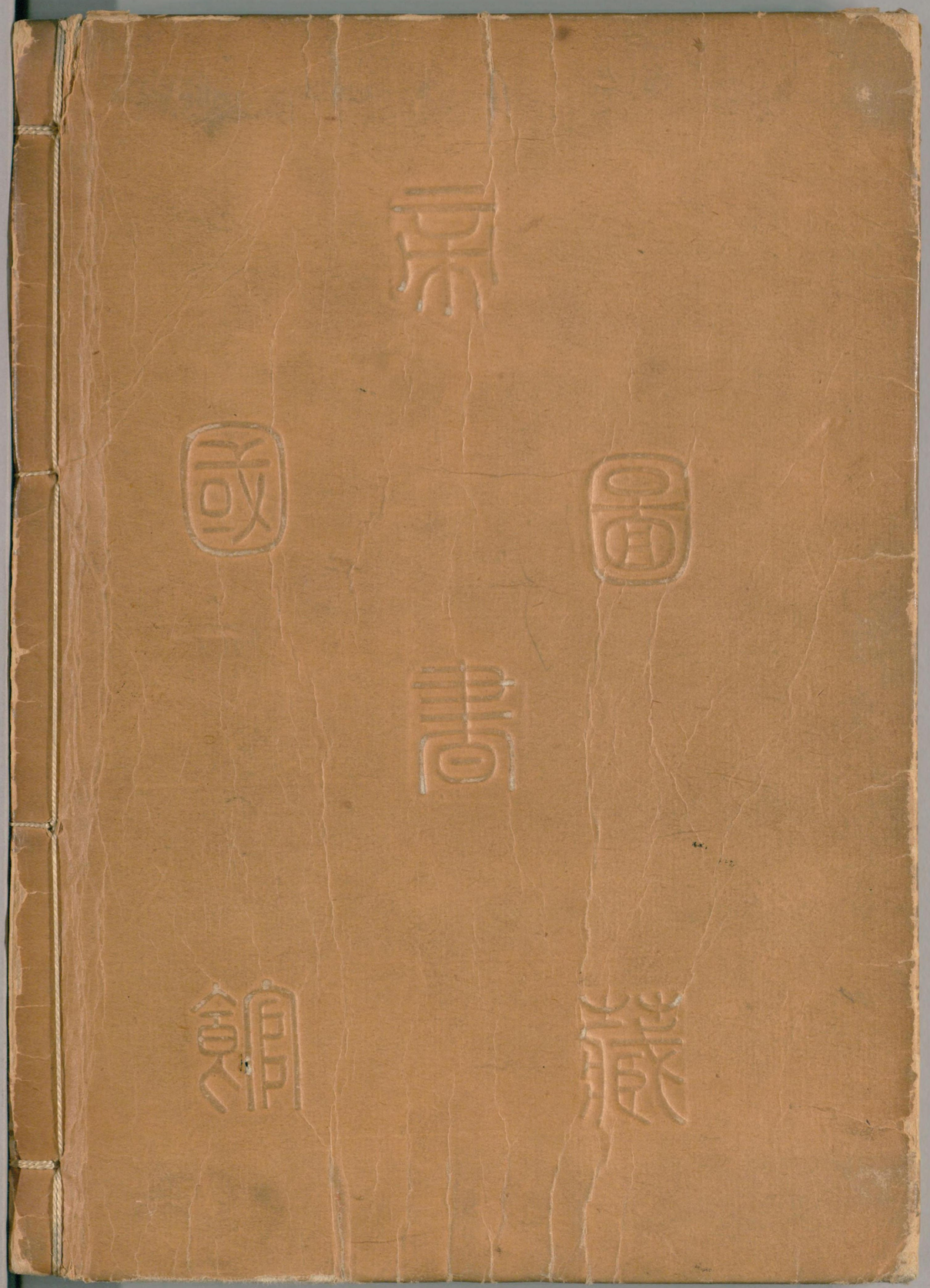
国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

ガラス使用

238
78

国立国会図書館　タイトル『百人一首抄』 請求記号 WA16-130

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『百人一首抄』　請求記号 WA16-130

ガラス使用